

東京天文臺の一年二個月 大正九年の夏、山本助教と共々本誌を創めたが、初め多數の會員を得るか、どうか少々心許なかつたが、それでも案外世間には天文の好きな篤志家が多かつた。見へて其の後續々本誌は購讀者を殖やし、天文同好會員は先輩の日本天文學會より頭數に於いて超過した。先づ目出度こゝで大に祝意を表して置く。

越えて大正十一年、吾が輩は多年親んだ、帝都の土地を離れ、東京へ来て天文臺に入つた。それは東京は出版業に於いて全國に冠たる土地であるから東京で思ふ存分ペン軸の折れ曲るまで書いて見たいと思つたからだ。さうして天文臺に勤める傍ら、精一杯書いて居たところ、去年の九月一日の大地震で、自分はその日土曜日だつたから、午飯少し前に役所を出て、近くの下宿に歸らうとしつ、ある途すがらだつたから、幸ひ恐ろしい目を見せず街上に悠々家屋の倒壊し、人々の壓死する有様をさくさく見届けた。

自分は外でさして大なる危険に遭遇しなかつた。さばいへ精神上に甚大なる打撃をうけ何だか今まで眠つて居た目が一時にぼつと見開いた様だつた。自分の本當に進むべき道は果して天文學であつたらうか、よく思索した。天文學は自分の性質として一寸その文字が複雑すぎる。天の笠をかなくりすてた文學が吾が輩に最も適する事を初めて發見し年頃親しんで學問に言ひ知れぬ愛別難苦を感じ、未だ見ぬ新らしき境地に入る不安と憤懣の心的

過程は近々公にする小説「二皮眼」で讀んで貰ひたい。

十一月天文臺にお別れして、晝夜の區別なく創作に耽つた。尤も條條をはたれた吾が輩の生活状態を心配して下さる知人もあるでせうが、そこはもう十分吾が振ふペン軸が、収入をしてくれるので大丈夫だ。

けれども、何となく自分は偏屈の馬鹿者の末練な心であらう。すつかりサイエンスと縁切れした氣になつたもの、矢張り明治廿六年以來やり續けた天文と別れるのが、何よりもつらい。又科學者のほしくれを標榜し得なくなつたことが、この上もなく、うら淋しいので又々逆戻つたやうな體裁となり、天文學はひま／＼博士も程近くにおいてになるので研究に事缺くこともなからうと安心して居る。又一方近頃地震學がはやり出したので時好に投ずるといふわけもないが、微力何のたしにもならないだらうが、今村博士におれだりして東大地震學教室に客分となり、濃飛關東兩大地震を親しく體驗して、地震・因縁淺からざるこの身は殘る半生を創作の傍ら地震研究に捧げたといふ思ふ。

こゝまで書いて讀み返して見ると、どうも言ひたいことを十分に言ひ得ない恨みがなきにしもあらず、忌憚なき表白は、どうか創作「二皮眼」を見て下さい。尙本會員の舊知諸子で御來信下さる方は東京麻布北新門前町五知野方古川宛にして下さい。左様なら(古川)

(二八)

## ○岡山支部一月通信

一、天泉研究會 十三日午後七時から宮原幹事宅にて開催した。

二、天文講話會 二十一日午後六時から岡山縣師範學校で甲種講習生の爲め講話會が開かれ水野幹事は左記の講話をなし、尙は月及び若干の星を觀望した。

星の話

三、三時望遠鏡 豫てから希望であつた三時望遠鏡を今度會員守屋氏の御厚意によつて註文する事が出来た事を同氏に深く感謝します

## ○松本支部通信

同好會々員三名同好者學生五名で大正十三年一月十三日午後七時から十四日九時迄通夜左

の觀測研究會を開きました、  
一、惑星、金、土、火、木星  
一、星雲、アンドロメダ、オリオン  
一、星團、プレアデス、カニ座、ヘルセウス  
一、重星、大熊、オリオン  
一、月及太陽

巷に望遠鏡は近江セールの會社より購入の英國エチナル會社製三時にて、八十倍と二百二十倍とを用ひましたが、何れも明瞭でありました。

松本市筑摩部

大正十三年一月十五日

上條 清人

## ○阪神支部通信

同支部に於ては尼崎市教育會の援助を以つて昨年十二月八日十五日の兩日に、上田助教を迎へて左の講演會を開かれた。  
曆の見方(六時から八時まで)講演 九時迄天體觀測)